

生きてゆく古代文学

糸川光樹

ここに記すのは、今回のシンポジウム「生きてゆく古代文学」のコーディネーターをつとめた者として、私が受け止めた内容の報告である。

シンポジウム（以下、「会議」という）は、二〇〇一年一〇月一三日午後二時から跡見学園（東京都文京区）小講堂を会場として開かれた。はじめに司会の金井清一氏から各パネリスト（以下、講師という）の紹介があり、続いて私が会議の趣旨を説明した。

私が述べたのは、第一に「古代文学」の範囲について、第二に「生きてゆく」という言葉の背後にある、古代文学の享受や研究の未来への私たちの不安感・絶望感またその克服への期待感についてである。

第一の点では、「古代文学」を、日本の古代文学、とりわけ記紀・万葉を中心とする上代文学に一応絞って考える

こと、ただし必ずしもそこに限定することなく、関連があれば異なる時代、異なる文化にも論を及ぼすことを提言した。

第二の点では、古代文学の明日の生存を脅かす「非文学的」状況について私の理解するところを述べた。すなわち、①文化が爛熟の域を越えて失速し、人々は何事についても積極的関心を失うこと、②経済・政治上の危機のため、文化的な余裕が無くなること、③人々の関心は、事実の情報や文学以外のジャンルに集中し、文学とくに詩に対する興味が消失すること、④一つには過去への興味が薄れ、二つには日本への興味が薄れて、日本古典への関心が減退すること、⑤国語力が低下して古典が読めなくなること、などが、およそ現在予見し得るところの、古代文学への「否定的」要素である。

以上のような私の話を枕にして、会議は各講師からの発表に移った。個々の内容については、この私の記事と並んで本誌に掲載されるので、ここに要約することはしない。三人の講師の発表が一巡したところで会議は二〇分の休憩に入った。

その休憩の間に、参会者（約一五〇名。以下、聴衆という）からの質問票を受け付けた。それは合計九票十三件であった。うち、多田氏への質問が最も多くて五件、孫氏・ポート氏に各三件、そして一般的な質問が二件あった。

多田氏への質問は、①氏の方法や見解は旧来の「文化ナシヨナリズム」と同じではないか、という批判、②日本古代文学が外国（中国）文学を受容しつつ展開したという事実をどう評価するか、という疑問、③氏の言われる古代的な世界観はその後も変化しなかったのか、それは現代にどう生きていると考えられるか、という質問、④言語と世界観との関係に関する氏の見解を比較文化の側面から更に詳しく知りたいという注文、に区別することができる。

孫氏・ポート氏への共通する質問としては、①多田氏の提示した古代的な世界観（自然観）をどう思うか、という質問、②孫氏は文学の普遍性に、ポート氏は文学の個性に重点を置いて話されたが、さらに具体的実例を知りたい、と

いう要望、③外国人研究者としての経験、国際学会での経験などを聞きたい、という注文、があった。

孫氏に対してはさらに、アジア諸国の文学と日本の古代文学という、異なる言語の文学を比較するには、その比較を可能にする論理が必要だが、その点をどう考えるか、という質問があった。

ポート氏に対してはまた、ヨーロッパに「民族の古代」とか「古代文学」といった概念があるか、あるとすればそれはどういうものか、いわゆる「古典古代」に対する態度も含めて、その研究や教育の現状を知りたい、という質問があった。

一般的な問題としては、古代文学への興味の育成、大学での古典教育の方法、研究と鑑賞との境界と相関、研究の果実の社会への還元、「上代文学会」としての施策などに関する反省的・建設的な質問があった。

休憩のあと再開した会議の冒頭で、私がこれらの質問を一括して紹介し、前半の発表とは逆にポート、孫、多田氏の順で、各講師の回答を求めた。以下、各氏の発言内容を、私の言葉で要約する。多岐にわたる発言を前後切り貼りし、語を補って整理した部分も多い。できるだけ趣旨を生かすようにしたが、文責はすべて私にある。

ポート氏

〔文学における普遍性と独特性〕 文学とくに詩作品の善し悪しを判断するには、どの文学にも共通して適用できる普遍的な基準がある。すなわち、音、リズム、イメージ、連想性、雄弁術、作者への共感、などがその基準である。しかし、具体的にどういふ音をよしとするか、どういふイメージをよしとするか、など、それぞれの基準について言語や文学の伝統による独特な要素がある。この普遍性と独特性の間の緊張関係が重要であり、それをどう整理するかが、研究者の課題である。そこには、言語学に通底するものがある。

普遍性といえば、たとえば柿本人麻呂の亡妻挽歌など、その感情の筋は、読者にそういう経験があろうとなかろうと、誰にもよくわかる、普遍的なものである。

〔ヨーロッパにおける古代文学研究の状況〕 ヨーロッパで古典文学と言うとき、二つの意味がある。一つは、ギリシャ語・ラテン語の文学であり、もう一つはフランス文学、イタリア文学など、各国の最も古い時代の文学である。後者の各国文学の伝統は、ほぼ八百年前後に及ぶので、その間にはそれぞれの言語の変化もある。ラテン語を習得するには二、三年かかるし、各国語の古代語・中世語を学ぶのも努力を要する作業である。それら古典研究に関する学校で

の教育は、日本の場合と同様、最近次第に軽視されて来た。国によって程度の差はあるが、それが一般的な傾向であると言える。

〔研究と鑑賞の問題〕 誰でも、文学作品に接したら、良いか悪いかの一応の鑑賞はできる。しかし、本人の研究的成果が伴うにつれて、その鑑賞は深まり、変化するのである。〔古代的自然観〕について、「古代的自然観」がどういふものであったかは、実は誰にもわからないことである。これが古代的な自然観だ、ということも古代人が文章で書き残したわけではないからだ。実際には、読む側のわれわれが、古代文学を読むにはこれこれの自然観の存在を「仮定」すれば理解し易い、というふうに考えて「憶測」するだけである。日本のみならず、どこの文学にも言えることだが、何といつても昔の人と今の人とは違うのだから、その仮説が絶対に正しいという保証はない。私たちは、できるだけ頭を柔軟にし、作品を何度も読みなおして、絶えずその仮説を検証していく必要がある。こうしたことについては、すでに荻生徂来が含蓄ある言葉を残している。

ところで、自然の声を受け身に聞きながらそこに天の声を感ずる、というような自然意識のことだが、それはおそらく日本語文法の性質と関わっている。日本語の受動・受け身には独特の機能がある。私の言語学者の友人の一人の

言葉によれば、日本語には「人がスル」動詞と「自然がナル」動詞の別があるという。こうした言語の面から説明ができる問題ではないかと私は思う。それにしても、日本人が特に自然に敏感であつて、しかもそれは日本に生まれ育つた人でないとわからない、ということが言われるけれども、私にはちよつと信じられない。ヨーロッパの詩を見ても、自然に対する敏感さを示す例は数多くある。たしかに日本の国文学の伝統の中には、その自然のイメージが豊かであつて、それを巧みに使つていふことは言えるけれども、自然に対する敏感さが日本人に独特のものだとは言えないと思う。

〔日本文学の国際的研究〕 欧米の日本文学研究者は、たいして日本に留学して日本の先生に師事したので、日本にある学派・学風といったものをそのまま引き継いでいることが多い。例えば、かつて私は「言霊」論を発表したが、同じ欧米の研究者でも全く別の見解を持つ人もあつた。日本の文学については、欧米人の間にもさまざま異なる意見があつて、それはほぼ、日本での状況を反映するものだと思われる。

孫氏

〔研究と鑑賞の問題〕 研究と鑑賞という二つの領域は、特

に次元を異にするというものではなくて、互いに反発する部分もあるが、関わりあう部分もある。研究の方は少数の人間の仕事で、鑑賞は社会の多数の人間がやることである。しかし、専門家による研究だけが強調されて、それが鑑賞の側に還元・普及されなければ、鑑賞の質は向上しない。研究の結果が社会一般に共有されて、はじめて鑑賞の層が厚くなり、それがまた結果的には研究のレベルを押し上げて行く。

研究と鑑賞に関連して、異文化間の交流の問題を言語の面から考えたい。母語を異にする研究者や鑑賞者が、例えば日本の文学に関わる時に、まず問題になるのは言語である。より具体的には、共同作業の過程における翻訳・通訳の問題である。その面で時代の先端を行つていふのは、文学界ではなくて経済界である。経済の交流、企業の進出などの実際の場面で、言語問題はある程度解決に向かいつつある。インターネットまたCDの進歩が効果を上げていふ。翻訳ソフトの開発も実用の段階に進みつつある。それが文学の世界に今すぐ応用できるわけではないが、将来的には期待が持てる。その話は別としても、例えば万葉集は、すでに中国語、韓国語をはじめとして多くの言語に訳され理解されており、また、中国の詩経はじめ詩書の多くが日本語に訳されて、日本におけるその研究が中国におけるそれ

よりも、深められている一面もある。言語の問題は、いずれは解決できると、私は楽観的に考えている。

〔自然観について〕 自然と人間の融合の問題だが、私は、西洋と東洋では全く異なるものがあると思っている。西洋は分析的、東洋は融合的である。東洋では、人間はあくまで自然の中の一部である。それが出発点になっている。例えば詩経の「關關雎鳩 在河之洲 窈窕淑女 君子好逑」では、雌雄相愛の鳥が砂浜で戯れている風景を全面に出出して、それに人間の感情を重ね、融合させている。西洋の詩では、風景は風景、人間は人間、というふうに関別記描写されるのが普通であろう。もう一つの例を挙げれば、記紀歌謡の「八雲立つ雲」の歌だが、この「八雲立つ」は無意味な枕詞ではない。中国の文献に多く出て来るが、新婚を祝う歌には紫の雲が現れる。共通して「雲」には深い意味が込められており、これはやはり西洋の雲とは異なっている。

〔古典の教育について〕 率直に言えば、大学の教授は自分の研究だけを重視して、教室でも高級な話ばかり、それで学生は寝ている、という現状がある。これではいけない。高級な話を、いかに分かりやすく説明して学生の興味を引き出すか、それを試みるのが教員の務めであると思う。でなければ、古典に対する学生の興味はますます減少するだ

ろう。やはり、学生の関心、社会のニーズがあつて、われわれの研究も維持されるのである。中国でも同様の状況があるが、私は危機感を持っている。

多田氏

〔立場と方法〕 私は徹底して近代主義者である。つまり、古典は正直なところ読めないのだ、というところから出発している。さきほどボート先生は「憶測」ということを言われたが、たしかに、われわれは古代に回帰することは出来ないで、古典を読むには、方法の仮説を積み重ねる以外にはないと考えている。そのことを、前提としてまず申し上げて置きたい。

〔自然観の継承と現代の感性〕 現代の文学表現では、風景描写などに意味があると思つて注目している。そういう例は現代小説に多く拾えると思う。和歌の方で心物対応構造というふう言われているが、いわゆる「寄物陳思」が和歌の基本構造である。そこに表現される自然は、景と心が一体化しているのであつて、比喩と捉えてはいけないものがある。そういう古代的自然観の表現のあり方は、意外なほどに日本人の感性を呪縛しているのではないか。それは時代的にもずっと降つて生きており、宮沢賢治の作品など、ほとんどそうだと思われる。現代短歌まで下がると色々実

験的な試みもあるのでそう明確には言えないかもしれないが、自然と我々を繋ぐ感受性というものは想像以上に我々を縛っていると私は考えている。

〔日本語の問題〕ご質問は、古代の日本語が作られる際、外国文学との接触があった、あるいは、一種の多言語状況というものがあつた、そして、外国の世界観も入つて来た、そういう時に、日本固有の世界観はどう変化したか、という趣旨だと思う。日本語の成立というのは、まだ結論の出していない問題で、私もわからない。私が基本的に問題にしているのは、ヤマトコトバの表現なので、もちろんそれは漢文訓読体などの影響も受けているけれども、基本的な文法構造には強固な独自性・持続性があると思う。それは、さつきポルトさんも触れられた、受動性、受動的な感受性といったものである。私が主として分析の対象にしているのは万葉集だが、そこから見えて来るのは、先程お話ししたようなことである。

比較文学をどう考えるかというご質問もあつたと思うが、結局比較文学というのは日本文学の問題だと考えられるし、そこで私はやはり日本語の問題から離れられない。私は純粹なバイリンガルというものの中には懐疑的で、やはり一つの母語が基本にあると思うが、日本語を母語とする我々の場合は、比較といつても、それは何よりもまず日本

語の問題として考えなければならない。というのも、外国語から色々な表現が入つて来るけれども、それをそのまま外国語で表現する訳じゃない。そういうものを取り入れて日本語として表現する。その影響で日本語が変わるということはあり得るにしても、大体は変わらない。和歌の場合など特に顕著だが、例えば日本語が中国語に置き換えられるということはない。だから、比較ということを考えるには、われわれで言うならば、日本語という問題から離れてはいけない。比較文学というのは、結局は日本文学の問題だ、というのはこういう意味である。

〔ナシヨナリズムおよびイデオロギーの問題〕（この問題を質問した品田悦一氏に対して）私は、万葉集というものが近代においていかにイデオロギー的に仕立てられていったかを実証的にたどった品田さんの仕事を貴重なものとして高く評価しているし、あれはその通りだと思う。問題は、それ以後のことにあるのであつて、品田さん自身はこれから万葉集をどういうふうに読んでいこうとするのか、それを逆にお尋ねしたい。ご批判のように、非イデオロギー的と称した私の発言自体をイデオロギー的だと言われてしまうと、これ以上何も言えなくなるが、私は学問の基本となる文献学の重要性は意識しており、その意味ではアカデミックスな国文学の伝統を継承しようとしていると言えるかもしれない。

れない。

孫氏（補足）

外国文化の吸収と固有文化の変容という問題で若干補足したい。先程多田先生から、母語としての日本語をまず考えるべきだというお話があったが、関連して、私は中国の音楽の研究のことを思い出した。よく知られている楽器「胡弓」は、皆、中国固有の楽器だと思っているが、実は違う。これはもともとアラビアの楽器である。その音楽はアラビアから中国・唐に入つて、今では完全に中国の音楽になつてゐる。この音楽を学問的・専門的に研究する場合には当然、どの部分がアラビアのもので、どの部分が中国在来のものであるか、やはり分析的に考える必要があるだろう。それは困難な仕事だが、これを、日本語の問題に当てはめて考えるとどうか。古代における日本固有の言語、これはアルタイ語の系統である。中国語とは全く違い、モンゴル語・朝鮮語・旧満州語などに近い。そして、時代を経た後に、その日本語でものを記録する段階になつて、漢文がたまたま入つて来た。その漢文なしには、古代・上代文学の記載はできなかつた。その段階で、日本語の中に漢文が密着してきた。在来の日本語と漢文は混交し、互いに影響関係を持つた。その結果である文献を、どのようにに分

析するかという難しさがある。在来の日本語だけに視点を置いて考えるのはどうかと思う。外国の文化を吸収しつつ自国の文化を形成して行くという日本文化の特質は非常に大事であつて、そこに他の国の文化との違いもあるのではないか。

具体例として人麻呂を考えてもいい。記紀歌謡の中の長歌と人麻呂の長歌とを比較すれば、内容においても表現においても、その相違は顕著である。人麻呂には当然、中国の賦の影響がある。それを視野にいれなければ人麻呂を徹底して研究することはできない。天皇讚歌の部分は、中国の聖天子を称賛する詩文に連なつてゐる。ただし、聖天子には易姓革命の思想があるが、人麻呂にあるのは天皇を神そのものとして絶対服従する、日本的な特徴である。要するに、文化の移入は選択的になされてゐるのであつて、自国に合う部分だけが導入されてゐる。

言語についても同様の事が言える。在来の日本語に外来の言語が導入された。そして、その時点以前にさかのぼる記録資料がない以上、我々は、すでに両者が混交した、その時点での資料を便りとして考えるしかない。研究はそのところから出発しなければならぬが、それは非常に困難な作業である。

以上で各講師からの回答が終わった。会場からの追加の質問はなかったので、私は、すでに議論の中で名前の挙がっていた品田悦一氏に発言を求めた。品田氏の発言は、質問票に重ねて再び多田氏に向けられた。以下は、その品田氏の発言と、それに対する多田氏の回答とを、私の言葉で要約したものである。前項同様、文責は私にある。

品田悦一氏

「日本の文化」というような枠組み自体が、近代になってから構築されてきたものだということを私は言いたいわけである。(日本文化の)ユニークさとか独自性とかいうものが強調されるようになったのも(近代の)ある時点からのことであって、それを自覚していただきたい。芳賀矢一が生きていた時代には、独自性よりはむしろ普遍性、日本文化の中には、インドの思想も中国の思想も全部詰まっているんだ、ということが強調されていたのだった。それが、ある時点から、日本の文化は世界的に類例のない、非常にユニークなものだということが言われるようになった。その「ユニークさ」を言う論調のいかがわしさについて、我々はやっぱり十分に自覚的でなければならぬと思う。そういった論調は、世界が欧米と日本だけで出来上がっているかのような図式を作って、日本が欧米に比べると非常

に違う、ということを言うわけだが、ヨーロッパだって地方や国によって色々あるはずなのにそれを実体不明のまま一括りにし、また、近隣の中国や韓国やベトナムやタイなどのことを全く視野に入れていない。脳の機能が欧米人と日本人とでは違うのだ、というような説は、俗耳には受けるかもしれないが、学問の名には値しな思っている。そういう説を援用しながらお話をされたということに、どういう戦略的な意図があるのか、ということが、先の私の質問の趣旨である。

多田氏

私は、そういう独自性とか、世界に冠たる日本文化とかいうことを考えているわけではない。最初に申したように、私の発想は、近代主義であって、その方法に従って万葉集の表現を見て行った時に、今日お話したように、受動的な表現のあり方というものに引つ掛かったわけである。これは和語の大きな特徴であって、それが日本人固有の心性に結びついていられるらしい。そう考えることによって、万葉集の読み方はちょっと変わってくるのではないか。それとナシヨナリズムとは土俵の異なる話だと思っている。

それから、これは品田さんのことではないが、イデオロギイ的立場からナシヨナリズム云々という批判をする人た

ちの論調で気になるのは、日本独自の価値というのが近代になって初めて生まれて来たというようにしばしば言われる点である。私は日本靈異記を扱っているが、あの「自土意識」っていうのは、すでにりつばなナシヨナリズムであると思うが、そういうところはどうか理解されるのだろうか。

以上で質疑応答を打ち切り、私がまとめの話をする番になった。ただし、あらためて全体を要約・整理する必要もないので、まず、今日の会議に先立って本年9月22日に駒沢大学で行われた上代文学会の五十周年記念公開座談会「上代文学研究の未来」の模様を紹介し、次いで、今日のテーマ「生きてゆく古代文学」についての私自身の意見の一端を報告することで全体のまとめに代えた。

以下は、私の意見の概要である。なお、そこでは十分に開陳できなかった部分を、今、この原稿を書く段階で、若干補入したこと、また、同じ問題についての私の詳細の論は、「万葉集の未来」と題して、研究同人誌『古典と現代』六九号（二〇〇一年一月三日発行）に掲載したことを、お断りしておきたい。

「まとめ」に代えて（桑川）

冒頭に述べたように、今日、古代文学が「生きて行く」

ことを阻むような、非文学的な状況が顕在化しつつあるようだ。さらに、文学の未来について考えてみたいが、そうなるかどうかしても政治と文学の關係に目を向けなければならなくなる。私は、文学の第一の存在意義を、多数決や統計や主義や教条的道德律やからこぼれ落ちる、少数・個別の、しかし広大な精神的領域を擁する問題に、表現を与え、というその機能に認めたいと思っている。文学は、その意味で政治からは最も遠い存在であるが、それ故にまた、すぐれて政治的存在であると言う逆説も成り立つであろう。サミュエル・ハンチントンの『文明の衝突』は、近未来の政治の状況を想定して、国民国家の対立に代わって、宗教によって色分けされる文明圏の間の衝突が激化すると予言している。ハンチントンによれば、「近代化」と「西欧化」を同義と見なすのは西欧的偏見であり、今後は西欧的価値観を排した「非西欧的」「近代化」が、世界各地の非西欧圏で進むであろう。イスラム文明にせよ儒教文明にせよ、一定の文明に属する諸国民は、それぞれ既存の国家の枠を越えて連携を強める。中国文明とイスラム文明の勢力が拡大し、「儒教—イスラム・コネクション」が形成され、それと西欧文明圏が激突するに至る。日本は西欧圏を離れて中国圏に帰属することになるだろう。以上がハンチントンの描く世界の未来である。私は、第一に、筆者が文明の対

立とするものの背後には実は貧富の対立が離れがたく存在するがその点が軽視されていること、第二に、彼が世界の宗教として、もっぱら創唱宗教のみに注目し、自然宗教を視野にいれていないこと、の二つの点で、必ずしも同書の趣旨に賛成する者ではないが、それらの点を除けば、それはおおむね説得的であると思っている。そこで、仮に世界がハンチントンに想定するような方向に進むとして（このシンポジウム開催に先立つ九月一日にニューヨークを中心として起こった、イスラム原理主義派による同時多発テロは、不幸にもその早い実例となったかに見える）、日本の文化はどのような環境に置かれることになるであろうか。

まず、言語だが、憲法はじめ諸法令に言語条項を欠いている現在の日本とは違って、複数の言語が国語・公用語として法律にも規定されるようになるのではないか。その際採用される言語として最も可能性の高いのは日本語と英語の二語である。中国自体が英語を公用語の一つにするであろう可能性を考えれば、日本で中国語が採用される可能性は少ないと思われる。

次に、研究者・鑑賞者の範囲だが、いずれも地球的な広がりを持つことになるだろう。日本文化の良質な部分は、いわば世界遺産として人類共通の財産になるであろう。また、世代の交代と共に、日本人研究者・鑑賞者の内質も、

今日から見れば異文化と思えるまでに変化するであろう。

また、世界各地で価値観の摩擦・相剋が激化して、それは日本にも及ぶであろう。非文化的あるいは反文化的風潮が爆発的に生じる事態もないとは言えない。

私たちが考えなければならぬのは、このように想定される環境に向かつて、日本の古代文学をどう「生きさせる」か、ということであろう。そしてそれには、まず確認しておきたいことが幾つかある。すなわち、

①日本の古代文学の、文学として、また、文化資料として「生きる」に値する価値の再確認。

②文化遺産を保存しなければならない、という考え方の根拠は何か。特に宗教的あるいは政治的過激思想が、その正義感に基づいて異文化の存続を否定するような時に、その不寛容な論理や行動に対抗するための普遍的な根拠の確認。

③各文化の保存・維持において、ネーティブの研究者が果たすべき役割の確認。例えば日本文化の存続のために私が働くと言う場合、私がネーティブの日本人であるという事実は、なぜ、またどの程度に、その動機や根拠としての正当性を持つのかということである。

以上について、私は私なりの肯定的な答案を持っているが、紙幅の関係でここでは省略する。次に考えるべきことは、

今後の教育の問題である。学校教育・社会教育を含めてであるが、記憶主義、総覧主義、抄録主義を脱して、古典をじっくりと味わうような教育の仕組みが必要であると考えられる。また、国際的研究・鑑賞・享受に関することだが、これまで単独の翻訳者によって行われることが多かった古典の翻訳は、一人のネーティブを含め、母語を異にする複数の翻訳者の共同訳という方向に進めるべきだと思う。上代文学会は、そういう場を仲介することもできるのではなからうか。

最後に述べたいが、私は日本古典文学の中には、文化資料として、また生きた文学として、「世界遺産」に値するものが少なからずあると思う。特に、遡ればアニミズムに至る自然宗教的感性の領域は、世界の創唱宗教と並んで、今後の世界に新しい意味を与えるかもしれないと考える。たとえば万葉集は、その一つの、しかも重要な見本になるのではなからうか。

以上

『上代文学』投稿規定

- 1 投稿者は会員に限る。
- 2 投稿論文の分量は四百字詰め原稿用紙四十枚以内(注をも含む)とする。
- 3 投稿論文はワープロ原稿をも認めるが、その場合にはなるべく字間・行間をゆったりと組み、表紙に四百字詰め換算した枚数を記す。
- 4 投稿論文は原文でなく、コピー二部を送る。
- 5 投稿論文の表紙には、投稿者の住所及び勤務先(学生の場合は大学名、学部学科名または大学院課程名、学年)を記載する。
- 6 投稿論文の送り先は事務局とする。
- 7 投稿論文の締切日は特に設定しない。
- 8 投稿論文に対しては、部分的修正を要求する場合がある。
- 9 投稿論文の採否は、編集委員会の議を経て常任理事会で決定する。
- 10 投稿論文は返却しない。不採択の論文についてはその旨を通知する。